

第十七回

現地人

某日、砂糖きび畑に入つてきびを一本折ると、現地人がコートと眼の前に立つてゐるではないか。

しまった！

どうしようと言川を見たが、彼も眼をキョトキョトするばかりで立ち竦んでいた。

誰もいるはずがないと思つて入つた畑に人がいた驚きと、あまりの近さにこちらはなんのなす術がなかった。

相手の現地人も畑にしゃがんで作業をしていて、われわれには気がつかなくならしい。養虫のような異様な格好の二人を間近に見て、逃げ出すこともできず、呆然となつて立ち竦んでゐる様子だった。

私はどうにもならず、相手の顔を見て照れ笑いをしたような気がする。間を稼ごうとしたのが、相手の気を荒立てないようにしたのか分らないが、人間切羽詰まると、こんなことしかできないものだ。

手真似で何か食べるものはないかと、現地人の家から盗んできた缶入りのきざみ煙草を出し、これと交換しないかと言つと、いまここには何も持つてきていない、部落へ帰れば食べ物はいくらもあるから一緒に来い。そついつ意味らしい答えがかえつてきた。

はて、素直にくついて行つていいものか言川は目配せして行つたと合図してゐる。そつだ、現地人をだまして食べ物を頂戴するくらい朝飯前だ、おかしなことがあつたら食べから逃げ出せばいいと勝手な解釈をして、一緒について行くことにした。

ところが現地人の人間は、人を連れて行くのに自分は先にたつて歩かない。われわれ二人にいいから先に歩けと指図してきたのは、勝手がちがつてこちらが面食らつた。

彼らは弓や槍を使う。敵に後ろを見せたら自分がやられると体で悟つてゐるのだ。われわれより用心深く、けつこつ頭がいいわいななど入んに感心した。

なんだが自分たちが先に歩かされると、今度はこちらが後ろからなにをされるか分からず落ちつかなくなつた。が、相手はたった一人、こつちは二人。

この部落にはかつて日本軍が使役に使つた者もいて、少しは日本語の分かるのがあるだろう。行けばなんとかなると言をへくして歩いて行つた。

道の分かれたところへ来て、どちだと振り返ると、あつちだ、こつちだと後ろから指で指図してくる。

後で考えたことだが、これがまた運命の岐かれ道だったようにも思う。ここで捕まらずに逃げていれば、ジャングルの中で食べ物もなく、二人とも野垂れ死していたかも知れないのだ。

だいぶ山の中を歩かされて部落に着いた。

部落の入口近くの小屋に入つて、ここで待つておれという。

暫くするとその男は、顔や体中に入れ墨をした酋長らしい老人と若者を従えて、足早にやつてきた。

部落の中にある一軒にわれわれを招き入れ、バナナ、パイヤ、甘酸っぱい南洋りんごくるみなどを出してきて、さあ食えという。

小屋の外には女や子どもたちがニヤニヤしながら、われわれを見ていた。

二人が夢中になつて食べるころには、女どもの姿はなくなつていた。部落中の屈強の男たちが内に外に取り囲んでいるのも知らず、二人とも食べることに夢中だった。

お前の腰にさしている刃物はなんだ？

それは切れないから研いでやると手真似でいうので、なにも考えずに手渡した。

われわれの話を通巻きにして聞いていた男たちが突然、一斉に立ち上がると、つとつとちらに襲いかかつてきて、袋だたきにされてしまった。暴れられては面倒と相手も死に物狂いで、二人を取り押さえて素手で殴つたり、棒でひっぱたかれた。鼻血を出し、脳しんとうをおこして、眼の前が真っ暗になつてしまつた。

気がついたときには、両手は手首から肘まで、両足はくるぶしから膝まで、木の皮でぐるぐる巻きにされていた。

宮川も同じようにされていた。頭が朦朧とする中で、あの納屋にすりりと並んでいた體を思い浮かべ、われわれもあんな風になるのかと思つと体中が凍りつくようだった。

なにしろ彼らは四十年ほど前までは食人種だったと聞かされていたのだから。

くっ

次回第十八回は四月六日(火)の予定